Ⅸ 紅　茶

1　商品特性

(1)　種類・産地・茶樹

茶は「カメリア・シネンシス」の学名で分類されているツバキ科の常緑樹で、その新芽を揉んで乾燥したものが、商品としての茶であり、熱水で煎出した液を飲む代表的な嗜好飲料である。製造工程でいつ熱を加えて酸化酵素を不活性にするかの違いで、紅茶（醗酵茶）、緑茶（未醗酵茶）、ウーロン茶（半醗酵茶）に大別される。

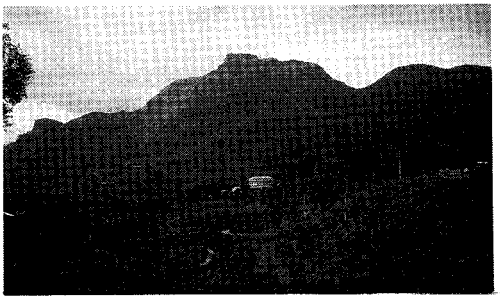
喫茶の習慣は中国で紀元前からあったとされ、八世紀の陸羽の著書「茶経」には、茶の栽培、製法、飲用法まで詳しく記述されている。当時の茶は熱湯処理後、茶の芽を擂り潰して塊にして乾したもので、これを削って飲用または食用にした薬であった。

現代風な嗜好飲料としての紅茶になったのは、十七世紀に茶がヨーロッパに紹介され、さらに広く大衆に飲まれるようになってからである。中国の港から熱帯の海を船で運ぶ間に醗酵して紅茶になったという俗説がある。日本風の緑茶を暑い処に放置しても、今風の紅茶にはなり得ないが、元来中国産の緑茶の浸出水はビール色で、紅茶も色がうすく、飲用法も同じであり、今でもそれほどの差はない。当時のヨーロッパには茶の他に、コーヒー、ココア、砂糖が紹介され珍重された。珍しい物同士で茶に砂糖とミルクを入れて飲む習慣ができ、赤味のある味の濃い茶に人気が集まり、その需要に応じた製法の茶が紅茶であった。十八世紀の中国の茶は、阿片戦争やアメリカ独立の原因にかかわるほどの重要な国際商品であった。

十九世紀に入ると、イギリス人はインド、セイロン（現スリランカ）、オランダ人はインドネシアのジャワなどの植民地に茶を植えた。当初は中国の種子を持ち込んだが、後にアッサムで発見されたアッサム種を栽培、これがヨーロッパ風の飲み方に適し、紅茶は一大産業になった。現在あるプランテーション式大茶園と工場、茶とその生産資材を運ぶための道路および鉄道、そして紅茶取引のシステムは、すべてこの時代の遺産である。

中国種とアッサム種　こうした歴史的由来から、紅茶をつくる基となる茶樹は中国種とアッサム種の二つの系統がある。中国種は放置すると枝分かれして藪になる性質で、葉は小さく、タンニン分も少ないので緑茶向きだが、耐寒性があるので高緯度の栽培限界地方や、熱帯の山岳地区では紅茶用に栽培されている。紅茶にすると比較的味も色も淡白な下級品が多い

が、特別な産地で独特な香料が珍重されているケースもある。一方、アッサム種は一本の大木になる直立型、葉も大きく、タンニンに富むので紅茶向きだが、耐寒性がなく無霜地帯にのみ生育している。しかし、長い間に交配や選抜が行なわれ、中間的性質や、両方の望ましい素質を受け



バングラデシュ，シレト地方の茶園の中に建つ精茶工場(上)と収穫を計る茶園労働者　　(写真・平島成望)

ついだ品種が選定されてきた。また、古くは種まきによって茶園造成が行なわれたため、芽立ちが不均一であったが、農業技術の進歩は挿木苗で質の良い茶葉を多収量揃って収穫できるようになり、新興茶産地が経営効率を向上させているのに対し、古くからの産地は茶園の更新が遅れ競争力を弱めている。これは茶園の造成期に厖大な資金を必要とし、植え付けて四～五年はほとんど収入が得られないが、成園となれば管理の費用は少なくて、収穫が半永久的に続くという事情による。

(2) 多種多様の商品と製法

紅茶はほとんど全世界の人に飲用されているが、国により飲用の習慣も違い、水質も違う。良質な水で香味の区別ができ、しかも紅茶は高級なものとのイメージがあり、比較的経済力の強い日本やドイツは、高くても美味しい紅茶を求めるが、生活に密着した飲料として量を求めるイギリス系、とくに生産国のインドは一杯当りの安い茶を要求する。一方、硬度の強い水質の中近東では、くせの強い紅茶を外観のみで判断する。人手で芯芽だけをより分けた紅茶を強壮剤的感覚で珍重するアラブの金持もいる。したがって同じ紅茶といっても上は一キロ一〇万円を越える珍品から、下はキログラム当り五〇円にもならないクズ茶まで、その価格差は非常に大きく、多種多様な商品が出回っており、同時に経済社会と習慣の変化で紅茶の価格評価の基準も変わってく

る。また、同じ嗜好飲料であるコーヒー、ココアが取引きでの指標（先物価格等）があるのに対し紅茶でそれができないのは、あまりに多様化し、同一の価値判断で規格化ができないためであるが、これはコーヒー、ココアが植物の果実であり、年一回の収穫、作柄の良否はあっても品質に与える人為的要因が少ないのに対し、茶は連続して生長している葉芽を収穫し加工することに由来する。

茶樹は適度の気温と土壌水分があれば萌芽し、芽が葉と茎、さらに枝に生長する。一回の萌芽は通常四～六枚程度の葉で、中心の芯芽が伸び、下葉は成長、硬化する。茶の摘採は最終の芯芽が充分伸びて葉状に出開く寸前に、芯芽とその下の二葉、即ち一芯二葉で摘むことを理想としている。充実した柔らかい組織のみで製茶するのが望ましく、したがって高温多湿多肥による急速に伸長した芽より、充分な日照で内容成分の濃い芽が好品質の紅茶となる。従来の高級茶産地では、実生による不揃いな芽の中から理想的状態の芽のみ人手で摘み、小さい芽は次週まで成長を待つ、いわゆる回り摘みで作業が行なわれた。一人当り一日五キログラム（製品で一キログラム）、年間一ヘクタール当りの収量も製品で五〇〇キログラム程度であった。しかしこれを続けるには多数の摘採労働者を要し、さらに労賃の上昇に見合う製品価格の値上がりがなければ成立たず、今はごく限られた農園のみになってしまった。

製法と製品

製造工程も消費に応じて変化している。茶の芽の形を残したまま揉って乾燥した古典的製法はごく一部の産地にしか残っていない。この場合、最終

仕上りの製品のグレードはＯＰ（Orenge Pekoe）、即ち一二メッシュ程度の篩で上下運動し細長く通過した形状が主力になり、破砕グレードはごく少ない。しかし、破砕した茶が浸出が早い（ティーバッグ向け）とか、一杯当りの使用量が少なく経済的であるとして高く売れるようになったために精茶工程も萎凋（陰干し）の度合いを少なく、揉捻も揉圧の強化から突起の改良により葉を引きちぎる連続強圧揉捻（Rotorvan）となった。在来製法といわれるものがこれであるが、篩分した製品はＢＯＰ（Broken Orenge Pekoe: 15mesh pass 20mesh on）が四五％、ＢＯＰＦ（Faning: 20mesh pass 40mesh on）が四〇％、Ｄ（Dust: 40mesh pass 80mesh on）が一〇％程度生産される。

そしてさらに細粒状に製法を改良したのが二本のスピードの異なる鋭い刃の付いたローラーの中を数回通過させるだけのＣＴＣ（Crush,Tear and Curl）製法である。篩別した製品の銘柄はＯＦ（Orenge Faning）と、同じ形でやや軽いＰＦ（Pekoe Faning）とで六〇％を占め、Ｄが三〇％程度、残りは篩別によるクズ茶で木質部分の多いＢＭ（Broken Mix）や微粉のＤ２で、工業用または産地住民用に供される。

製造方法の変化にともなって、求められる茶の芽の形質も変わり、いくらＣＴＣ製法が収支上有利といっても、アッサム系の葉でなければ浸出水の色の濃い利点が活かせない。また一時的に需給のバランスが在来製法の茶に対してくずれているだけかも知れず、増産分がＣＴＣ製法に集中、再び香味の良い在来製法、古典的製法に日の目があたる時がくるかも知れない。

この他の紅茶の商品特性として重要なものに、パッカーによるブレンド技術がある。単品の欠

点をカバーするブレンドは長い経験を要する特殊技術で、無限に変化する原茶の鑑定買付とともに、均一商品の安定供給と商品価値の格上げに必要となるが、これのできるティーテースターは世界でそう多くはない。

2　世界の需給状況

(1)　生産国の生産と輸出

世界中の茶の生産量は約二五〇万トン、その約八割が紅茶である。気象災害や病虫害に比較的強い茶樹の特性上、旱魃や騒乱による一時的、局所的減産はあっても、全体としての生産は若干ずつ増えている。一方、需要は南西アジアから中近東とソ連で急増、イギリス圏は減少ぎみだが、その他欧州やアメリカでは若干の伸びを示し、需給のバランスは一応均衡している。ただし、瞬間的にはコーヒー等他の嗜好飲料の価格の変動につれて、代替的消費増が起こり、供給不足から価格の上昇、生産国の国内民政対策による輸出抑制や投機資金の流入で、極端な暴騰となることがあるが、末端価格の上昇による実需の減少と摘採の粗雑化による増産で、相場は沈静化するのが常である。

世界最大の生産国 生産消費国インド

の個々の事情に目を向けると、まず最大の生産国であり輸出国であるインドは、ヒマラヤ山麓の西ベンガルからアッサム諸州に広がる北インド茶が五三万トン、ケーララ州、タミルナード州周辺の山間部で通年生産している南インド茶が約一七万トン、合計七〇万トンが年間生産量で、その内二二万トンが輸出されている。

インドの茶産業は一九世紀にイギリス資本により開発されたが、独立後徐々にインド資本に転換された。しかし長

表1　世界の茶生産量

（単位：1,000トン）

	1965	1975	1985	1988
インド	366.4	487.1	659.2	701.1
中国	150.0	211.0	432.3	545.4
スリランカ	228.2	213.4	214.1	228.2
ケニヤ	19.8	56.7	147.1	164.0
トルコ	13.0	55.6	137.1	153.2
インドネシア	44.2	70.9	132.3	135.6
ソ連	48.3	86.3	152.1	120.0
日本	77.4	105.4	95.5	89.8
イラン	15.0	23.0	41.5	55.6
バングラデシュ	26.6	29.0	43.3	42.6
マラウイ	14.7	26.3	40.0	40.2
ベトナム	5.9	16.0	31.0	38.0
アルゼンチン	17.5	27.9	29.0	35.0
その他	55.5	118.7	134.2	130.1*
合計	1,082.5	1,527.3	2,288.7	2,478.8

（注）＊その他の主な国（台湾23.6，ジンバブエ16.6，タンザニア14.6，ルワンダ12.2，南アフリカ11.8，ブラジル10.0，パプア・ニューギニア8.0，モーリシャス6.9，マレーシア4.8，ザイール4.5，ブルンジ3.9，ウガンダ3.3）。

（出所）International Tea Committee Bulletin, *Tea Statistics*, J.Thomas and Co. Ltd., 各年版。

期の茶価低迷で茶園の更新は進まず、またインド政府自体世界のリーダー国を自認し、茶価維持の為、増反抑制策をとっていた。しかし国内需要の伸びで輸出余力はなくなりつつあり、政策を変え、増反奨励、新しい茶産地の振興を始めたが、計画どおりには進展していない。国内需要に関しては伸びたとはいえ、一人当りにすれば年〇・五キログラム余りで、八億の国民が一日一杯ずつ多く紅茶を飲むだけで生産量を上回る消費となる。実際、紅茶は最も安い飲料であり、栄養供給源といわれている。大道で売られている砂糖とミルクのたっぷり入った紅茶が一杯〇・六ルピー（約5円）、代替品はない。最近の消費の伸びは都市部より農村地方とかで、やっと農村も紅茶が飲めるように豊かになってきたともいえる。

インドにとって紅茶は外貨獲得の主力商品でもあり、少なくとも二〇万トンの輸出目標を設定し、世界各地で消費促進のための活動を展開している。現在、インド紅茶の最大の買い手はソ連で輸出量の四三％を占めている。二位のイギリスは一四％、二十年前までは輸出量の大半を独占していたのに、完全に市場が変わってしまった。これにはソ連の対インド接近政策もある。この両国の貿易は、国際通貨による決済を行なわず、交換決済であり、ソ連が武器、機械等を送り、見返りに紅茶等を引き取っている。ソ連の茶専売局の係員がカルカッタに常駐し、ＯＰ、ＢＯＰといった形状の大きな紅茶を仕入れており、この種の茶の市況はソ連の動きに左右される。

国有化された　スリランカ紅茶　第二の輸出国スリランカの紅茶産業は十九世紀の中頃、コーヒーがサビ病で全滅したため、これに代わって興された。圧倒的にイギリス系企業によ

って運営されていたが、一九七六年バンダラナイケ政権が茶園の国有化を断行した。それが提案された七〇年頃より、茶園の管理が悪くなり、更に国有化による技術者の混乱で生産量も品質も低下した。ピーク時に二三万トンであった生産が一八万トン台に落ち、やっとこの数年元の水準に戻った。茶産地は中央山間部の西側、デインブラ、ディコヤ地方が最も大きい。年間を通じて生産されるが、季節風の関係で一～二月が乾期で品質が良く、四～六月は増産期となる。一方、東側のウバ地区は七～八月に乾期を迎え、価格は高くなる。スリランカ紅茶の区分けは工場の標高によって二〇〇〇フィート以下を低地産、アッサム大葉種で主に中近東向、四〇〇〇フィート以上を高地産、交配雑種で高級品、その中間部を中

表2　世界の茶輸出量

(単位：1,000トン)

	1965	1975	1985	1988
インド	209.4	223.6	214.0	221.5
スリランカ	224.3	212.4	197.6	219.7
中国	36.0	61.3	136.9	198.3
ケニア	16.9	52.6	126.1	138.2
インドネシア	32.3	46.0	90.1	92.7
マラウイ	13.2	24.2	37.4	36.9
アルゼンチン	12.3	17.4	30.7	33.0
バングラデシュ	2.9	24.1	30.3	26.2
ベトナム	3.4	7.9	12.0	13.5
ジンバブエ	－	1.3	12.0	13.5
タンザニア	4.4	10.4	13.0	10.0
ブラジル	2.1	3.1	8.8	9.5
その他	53.4	71.3	44.4	40.5
合計	610.6	755.6	953.3	1,053.5

(出所)　表1に同じ。

地産と分類している。経営的には中地産が最も苦しく荒廃している農園も目立つが、逆に政府の支援で近代的茶園に更新できたエステートもある。スリランカ紅茶の市場は世界的に広がっているが、六五年にはかつて六〇％近かったイギリス圏の輸出が一〇％まで激減し、現在はエジプト、イラン等中近東イスラム圏が七〇％を超すようになった。この点で紅茶の質の変化も当然といえよう。製造法はロートルバーンによる在来製法が圧倒的で、ＣＴＣ製法は少ない。

新興生産国の台頭　新興茶産国として成長著しいのは、アフリカ、とくにケニヤである。第二次大戦以後、インド、スリランカの現地化政策で追われたイギリス人プランターは、アフリカ内陸部に新しく紅茶園を造成した。改良品種と新型設備（主としてＣＴＣ）を導入し、土壌と気象条件にも恵まれ、年間均質で高級品として評価されるようになった。生産量は一九六五年には二万トンに満たなかったのに、一九八八年は一七万トンに近づいた。販売先は常に五〇％がイギリス本土に送られている。ケリチョー、ナンディヒルといった主産地は依然イギリス系企業が活動しているが、一方、ケニヤ山周辺部で農民に茶を植えさせ、協同組合的に工場運営を行なうＫＴＤＡ（ケニヤ茶開発機構）が世界銀行の資金でどんどん拡大してきた。ＫＴＤＡの取扱いは、すでにケニヤの生産の半分を超えたとみられている。そして最近の好景気で農民が大変豊かになっており、他の茶生産国の政府が自国にこの方式の導入を策する理想的な紅茶園の経営である。

ケニヤと同時に戦後スタートした、マラウイ、ジンバブエ、ルワンダは少量ながら順調に伸び

ているが、タンザニアは政策的な問題もあり、あまり伸長せず、逆にウガンダ、モザンビークは内乱で激減してしまった。

その他の国々での生産　伝統的茶生産国である中国の生産地は広い地域に分散しており、戦争で茶園は荒廃したが、茶葉公司と各地の人民公社の手で復興し生産量は五〇万トンを超した。その内約九万トンが紅茶で、湖南、四川、広西、雲南、広東省が主産地である。国際的には祁門紅茶（安徽省）が特有な香りと甘い味で有名であるが、生産量はわずか六〇〇〇トンである。雲南大葉種と呼ばれるアッサム系の紅茶も雲南や南海島で増産されはじめたが、国内の包装品用に用いられ、輸出余力は少ない。自由諸国への輸出量は一七万トン、その半分が紅茶でほとんどが増量用の安物である。一〇億の人口の大部分は喫茶習慣があり、潜在的国内需要は非常に大きいが、物価の割に割高で政策的に輸出に向けている。

戦前の主産国インドネシアは、ジャワとスマトラの山間部にある旧オランダ系茶園を国営農園として運営、その他華僑系を合わせて生産量は一四万トン。在来製法で中級品にランクされ、輸出先はアメリカ、パキスタン、オーストラリア等が多い。

バングラデシュには英領インド時代の茶園があり、四万トンを生産、品質的には北インドに似て、パキスタン等で消費される。

輸出は少ないが大生産地としては黒海周辺のソ連とトルコがあり、各一五万トンを生産している。共に茶の栽培北限地、中国種しか育たず、品質的には最低級、単独で国際市場には通用しな

い。専売制度による保護と輸入茶の配合で域内消費に供している。この地方でイランにも六万トンの生産がある。

一方、南米ではアルゼンチンに四万トン、ブラジルに一万トン、他にペルーとエクワドルにわずかだが産地がある。アッサム系の改良品種だが、雨天が多いことと人手不足で機械摘採となり、アメリカ向けの下級品産地である。

他に東南アジアではマレーシア、パプア・ニューギニアでアッサム系の比較的上質品が生産されていたが、労働力不足で品質が低下し、国際市場に通用しなくなった。さらに日本、台湾、ベトナムで以前若干の紅茶もあったが、最近は緑茶、ウーロン茶主体となっている。

(2) 消費国の輸入状況

消費はイギリス系で減、ソ連・東欧で増大　次に消費国の実状に目を向けると、元来、紅茶はイギリス系民族の間で最も普及した飲み物であり、一人当りの消費量は圧倒的に多い。しかし、これらの消費は漸減傾向を示している（表3）。

最大の輸入国であるイギリス本土の消費量は一九五八年頃は二五万トン（一人当り四・五キログラム）もあったのに、一九八五～八七年には一六万トン（一人当り二・八キログラム）まで落ちてしまった。その理由としては、飲料の多様化、とくにコーヒーの飲用機会の増加、ティーバッグ

表3　主要消費国の輸入量

（単位：1,000トン）

	1965	1975	1985	1988
イギリス	235.7	193.4	155.4	162.7
ソ連	30.9	55.4	95.8	140.0
アメリカ	58.4	71.8	79.1	90.1
パキスタン	−	52.0	89.1	85.5
エジプト	28.7	40.5	76.2	76.4
イラク	12.7	18.9	34.6	57.7
イラン	9.7	12.3	32.5	40.3
ポーランド	5.7	15.1	34.7	33.6
オーストラリア	28.8	26.3	20.7	19.4
サウジアラビア	−	5.8	20.6	19.0
カナダ	19.7	20.8	15.7	14.1
西ドイツ	8.2	10.4	15.5	13.6
スーダン	10.1	11.1	13.4	13.0
チリ	−	7.2	12.4	10.7
アイルランド	11.9	13.5	10.7	10.4
南アフリカ	17.1	21.3	11.2	11.0
その他	105.9	167.3	219.8	231.2
合計	583.5	743.1	937.4	1,028.7

（出所）　表1に同じ。

の普及による一杯当りの使用量の減少、小売価格の値上りに対する家計上の節約が考えられる。そして、アイルランド、オーストラリア、南アフリカ、ニュージーランド、カナダでも程度の差はあるが、同じ傾向を示している。

一方、輸入量が急増しているのはソ連で、自国の生産地帯がチェルノブイリ原発の事故で汚染され、一部収穫不可能になったこともあるが、元来紅茶好きの国民を専売制度で抑制していたのが、民主化の動きで質と量の両面から輸入を増やさざるを得なくなった。一人当りの消費

量は十年前の倍の約一キログラム、一九八八年の輸入量は一四万トンで、これに国内産を混ぜて一万トンの包装品を東欧に再輸出している。なお八九年は二一万トンを買い付けると噂され、これが今回の値上りの最大の要因とされている。また東欧圏、とくにルーマニヤはまったく同じ傾向にある。

アメリカの消費量は年間約八万トンで安定している。アメリカは元来コーヒー飲用国であり、一人当りの紅茶の消費量は〇・四キログラムに満たない。主としてアイスティにして夏場ソフトドリンク風に飲用されている。したがってティーバッグが六〇％、インスタント・ティー（ティーミックス）が三八％となり撤紅茶の市場はほとんどない。しかしコーヒーの異常値上り時には、紅茶の代替需要が若干発生した。

続くパキスタンはバングラデシュの独立で紅茶の輸入国になったが、インドと同様、人口増と飲用増でこの十年で消費は倍増している。

中近東のアラブ諸国は宗教上の理由でアルコールを飲まないこともあり紅茶の需要が大きい。エジプトは粉茶、他のアラブ諸国は外見の黒いクセのある茶が好まれている。アラブ諸国は平均して輸入量はここ十年で七〇％増、生産国およびイギリスからティーバッグ等の包装品も大量に輸入されている。

高級茶の買付けで話題になる西ドイツをはじめとするヨーロッパ諸国の一人当りの消費量は多くないが確実な伸長を示している。

今後の長期的需給予測に関しては数多くの不確定要素があるが、供給面で大きく期待できるのはケニアのみ、インド、中国は国内需要の伸びに対応するのがせいいっぱいで、スリランカは民族紛争の沈静化と海外の援助しだいである。一方、需要は石油価格の下落で中近東の購買力に陰りがあるとはいえ、全般的には順調、基本的には生産過剰の時代は終わり、比較的短いサイクルで相場が変動すると思われる。

(3) 流通構造

紅茶の取引きの基本はオークションにある。まず生産工場（エステート）を管理、業務代行するエージェンシイハウスが銘柄（工場名）、荷口番号、形状（BOP等）、荷姿（標準は三〇センチメートル×四〇センチメートル×五〇センチメートルのベニヤ箱入り、小型の重い茶は三〇センチメートル×三〇センチメートル×五〇センチメートルのハーフサイズ、地域商内用として紙袋または麻袋入りもある）、入れ目（五〇キログラム前後）、箱数と現荷から抜き取った見本をブローカーに渡し、オークションの申込みをする。ブローカーは見本の鑑定評価をするとともに記載事項をカタログに印刷、見本とともに買い手に配付する。買い手の鑑定人がカップテストの上で希望価格を決め、当日セリ落すシステムとなっている。見本は世界中に郵送できる余裕をもって手渡し、海外の買い手は電信によりセリ落としを依頼する。ブローカーの司会で下値からセリ上げ、最高値売却を原則とす

るが、ブローカーの評価と差があると売却しないケースもある。しかし翌日ネゴする権利は与えられ、余程生産過剰の時期でなければ売れ残り、再プリントになることはない。

オークション　主なオークション開催地としては、消費地ではロンドンが長い歴史をもち、

での上場　イギリス系企業が世界の紅茶産業を占有していた頃は、世界の紅茶貿易の中心であり、ロンドンオークションの平均値が、紅茶相場の指数として通用、また、上場を待つロンドンの紅茶の在庫の増減を先行きの相場予測の判断資料として世界中に通知されていた。しかし生産国のナショナリズムでイギリス系企業の影響力が弱まり、生産国内のオークションで上場する割合が増え、最近のロンドンの上場量は年に四万トン程度、十年前の半分、五十年前の四分の一に減少し重要性はうすれた。生産国ではスリランカのコロンボが一番大きく、インドは北インド茶の輸出港カルカッタと南のコチンが歴史も古く輸出向けの重要性は維持しているが、国内需要が増えるにつれて生産地に近いガウハチ、シリグリ、クーナー、コインバトール等に上場される比率が多くなった。東アフリカ茶はケニヤのモンバサとマラウイのリムベ、バングラデシュはチッタゴン、インドネシアはジャカルタで、いずれも毎週開催され、全世界のオークションの上場量は九〇万トンを超えている。

場外の直取引きはスリランカとバングラデシュはほとんどなく、インドは生産者との直接交渉による取引きが三〇％、ケニヤはＫＴＤＡが直接取引きを主体にしており五〇％、しかし値決めはオークションの相場を参考に行なわれる。オークションの価格はそれぞれの国の通貨で行なわ

れ、海外の買い手は代理人の口銭、輸出経費の他、国によって異なる輸出税を負担、スターリング、またはドルに換算決済する。一方、売り手の生産者も上場口銭のほか、地方税や時により加算税、負担金を相殺されて受け取る。ジャカルタの国営農園主催でＦＯＢ米ドルによるセリを行なっている。

世界の茶商は東インド会社時代からの伝統的ヨーロッパ系の茶商、大手パッカー系の支店網、中近東、ソ連を顧客とするインド系茶商が入り混り、独占的強力な業者はないが、最近ユニレバーが強力になりつつある。まず米国リプトンを所有、英国リプトンを買収、さらにブルックボンドにＴＯＢをかけて手中にし、その綜合力はあなどれなくなってくると思われる。

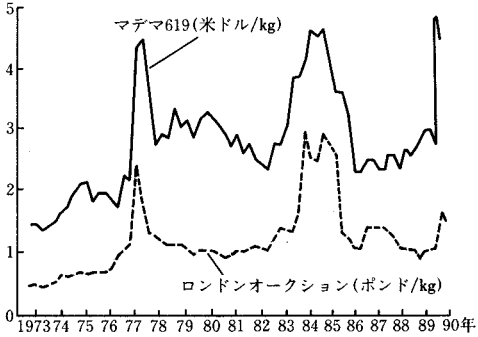
3　価格と商品協定

紅茶の価格を示す基準が明確でないにしても市況の変化はあり、長期間の比較は各地オークションの年間平均価格および消費国の物価指数、標準品の市況をみるほかない。そして市況は当然需給のバランスによって決まるが、価格の低迷に苦しむ生産国では何回かの国際協定によって市況の維持が試みられた。

戦前・戦後の相場の上昇・下落　一九二〇年ロンドンの在庫が大幅に増加、相場が急落したため、インド、セイロン、ジャワの生産者が自主的に二〇％生産削減を実施したが効果が出ず、翌年輸出制限も行なって、やっと在庫が減り価格を戻した。さらに三〇年に不景気による消費の減退で、茶が予想以上に輸出市場に流れ相場下落、三三年国際茶協定が結ばれ、第一次大戦の統制に至る八カ年実施された。この協定は主に輸出制限であるが、生産制限もあり、原則的に新植も禁止された。ただし新興国の枠も考慮され融通性のあるものであったが、ロンドンオークションの平均相場は一キログラム二一ペンスから二八ペンスまで回復、その後もゆるやかに上昇した。

戦後、植民地の独立や荒廃した茶園の混乱期を経て一九五四年後半に相場の急騰期があった。ブラジルの大霜害でコーヒーが暴騰、ベトナム米軍の特需用に紅茶が代替え入札される等、下級品は瞬間的に三倍まで上がったが、一年で元に戻り、その後二十年以上にわたり、一キログラム五〇ペンスから四〇ペンス台の低迷期が続いた。物価の上昇とスターリングの下落を考えると値下がり続

図1　ロンドンオークションとマデマ619の年次変化



(出所)　筆者作成。

けた感があった。たまりかねた生産国は六九年十二月ＦＡＯ（国連食糧農業機構）の呼びかけでモーリシャスに集まり、生産国別に輸出割当の実施を申し合わせた。この時初めて輸入国側も参加、価格の急騰をさける要望や、消費促進運動、最低価格制等を協議した。ただしこの協定は数量的には生産国の輸出最大可能量を示し、しかも拘束力をもたない非公式なもので、茶商間では実効を疑問視されていたが一応七〇～七六年の間実施され、ロンドンオークションの平均値は四六ペンスから八四ペンスまでになり、さらに七七年の急騰で廃止された。

高値の持続　この時の相場の上昇は協定によるもの以外の要素が大きい。まず前年ブラジルの霜害でコーヒーが三倍に値上がりし、アメリカの主婦にコーヒー不買運動が興り、その代替需要に加え、アフリカの干害による減産、そしてオイルマネーを手にした中東産油国が先高とみて、大量の先物契約をしたことで、二～三月の生産、出回りの少ない時期に毎週一〇～二〇％値上がり続け、四月以降の増産期にやっと落ち着きを戻した。次の大相場は、八三年後半から八五年初めまでで、これにはコーヒーとの関連はない。東南アジアの干害による減産、スリランカの民族紛争によるコロンボの貯蔵茶の焼失等で、供給不足が生じ、またインドの国内の需要増から、インド、スリランカが徐々に値上げし、八三年末インドのＣＴＣ紅茶の輸出禁止の情報に同種の生産国アフリカが棒上げ、これが他の市場に広がった。

六月の増産期にインド茶の輸出は再開、一応の落ち着きを示したが、秋に輸出予約が急増、再び輸出禁止、再上昇した。この時点でインドを中心とする生産国が、紅茶の高値安定を策し、国

際協定の話し合いをしたが、急成長しているケニヤの反対で実現しなかった。そして各国の増産と小売り価格の値上がりで消費が抑えられ、一九八五年に入り相場は下降、インドも輸出を再開、その後は比較的安値が続いた。ところが八九年八月末、インドが値上げし二回のオークションで六割高、ついでスリランカ、ケニヤ、インドネシアと九月中に全世界に波及した。南インドの旱魃とアッサムの洪水、スリランカのテロによる工場の焼失といった減産要因とソ連の大量買付けで需給のバランスが崩れたためとされている。またインドの総選挙前でもあり再び輸出禁止の心配もあったが、国内向けと輸出向けのオークションを分離する処置がとられただけであった。しかし八九年末現在、ほぼそのまま高値は維持されている。

4　日本の需要構造

国産品生産の経過　日本に紅茶が紹介されたのは緑茶に比べてごく新しく、下田開港の時ハリスが幕府に献上した品の中にみられる。一八七四年（明治七年）には政府が紅茶伝習所を設立、国産紅茶の生産輸出を検討した。市販の初めは一八八六年（明治一九年）銀座で三重紅茶が、翌年イギリス紅茶が輸入され、喫茶店が上野にできた。これらは非常に高価であり、一般の消費は一九〇六年（明治三九年）明治屋がリプトン紅茶を輸入発売してからとい

われている。その後、国産紅茶のアメリカ向け輸出の変遷があり、さらに二七年（昭和二年）三井合名会社が台湾で紅茶を生産「日東紅茶」を発売した。三八年（昭和一三年）輸入禁止とともに戦時中は国産紅茶（主に台湾）で需要をまかなった。戦前の需要はピーク時で五〇〇トン程度であった。一九四八年（昭和二三年）に輸入が再開されたが、戦後の外貨不足で国産紅茶の品質補強の配合用として割当制度が発足した。

国産紅茶は農林省の奨励策もあり、鹿児島県等に紅茶品種が植えられ、さらに一九五四年の国際市況の高騰期に世界中から注文が集まり、緑茶生産地区でも紅茶を生産、同年の七二一〇トンの生産、五一八二トンの輸出という最高記録を作った。しかし市況の落ち着きとともに競争力を失い、さらに緑茶の値上がりで紅茶の生産が減り、数年で輸出は止った。

高級品のみ輸入　国内の消費は一九四〇年代は缶入り紅茶が主体で、五〇年代初めには戦前のレベルを超えた。六〇年代には簡易包装の普及品が売り出され、消費は一五％以上の急上昇を示した。同時に輸入の割当を有しないリプトン、ブルックボンド等のイギリス銘柄も、権利者と提携して原料を輸入、日本国内で包装の上発売した。イギリス銘柄は輸入枠の不足をカバーする目的もあり、ティーバッグとギフト市場に販売の主力を注ぎ、これが成功し、国産銘柄は日東紅茶のみ残して脱落した。その後外貨事情の好転、生産国からの市場開放の要求、生産農家には緑茶生産への転換指導で、輸入枠をどんどん増やし、一九七一年に紅茶輸入の自由化が行なわれた。さらに関税も三五％から五％（特恵国には二・五％）と大幅に引き下げら

表4　日本の紅茶の輸入量と単価

(単位：トン，カッコ内は1キログラム当りの値：円)

	撒紅茶	包装紅茶	インスタントティー
1965	2,613 (597)	−	−
1970	6,404 (640)	31 (894)	27 (2,900)
1975	7,334 (725)	159 (1,777)	24 (3,300)
1980	7,041 (963)	558 (1,975)	27 (2,500)
1985	7,527 (970)	560 (2,650)	83 (2,656)
1988	9,141 (464)	1,120 (1,921)	113 (1,359)
1989	**12,409 (450)**	**1,106 (2,151)**	**107 (1,439)**

(出所)　大蔵省外国貿易統計。

表5　日本における紅茶輸入の国別推移

(単位：トン)

	1980	1985	1988	1989
スリランカ	2,608	3,593	4,144	5,269
インド	1,209	1,123	1,859	3,132
シンガポール	1,203	1,235	1,643	1,402
イギリス	1,809	1,064	1,136	1,066
インドネシア	−	27	77	889
アメリカ	336	248	487	449
ケニア	116	336	369	487

(出所)　表4に同じ。

れて、日本国内の紅茶生産はほぼ皆無になった。したがって現在日本国内で売られている紅茶はすべて輸入品であり、しかも世界的レベルでいうと高級品のみ売られている。これは紅茶が文明開化の上流志向のイメージで売られた経緯による。輸入先は生産国としてはスリランカ、インド、ケニヤ、中国の順で、八九年になりインドネシアが三位に急上昇した。

一方、イギリス銘柄はブレンド国としてイギリス、シンガポールがあり、実際

は上記生産国の混合品である。最近になってアメリカおよびフランスの包装紅茶が主にデパート等で販売されている。包装用紅茶の輸入量は一九七四年の八九二一トンが最高で、その後七〇〇〇トン前後であり、消費量は七五年以降安定している。

したがって日本における紅茶の需要構造は緑茶とまったく異なり、商社を通じて輸入、パッカーによるブレンドと包装、食品問屋を通じて小売店に納入する。とくにスーパーマーケットの比率が高く、これを量販市場といい四〇〇〇トン、出荷額で二〇〇〇億円程度のマーケットである。次にデパートを中心とする贈答品市場は外国銘柄、とくにトワイニングが強力だが、コーヒーに喰われ一時の勢いはなく、一三〇〇トン、一〇〇億円程度になった。この他業種用の市場がある。元来はコーヒー業者が喫茶店に納入したり、撒茶を計り売りしていた市場で一〇〇〇トン、二一億円程度の規模でしかなかった。しかしこの数年インスタントティー、ティーミックス、紅茶ドリンクに対し、大手食品メーカーが続々参入したため、原料用紅茶の需要が非常に大きくなってきた。八五年以降の輸入量の増加はすべてこの需要増によるものであり、とくに液体紅茶が急伸した八九年の輸入通関量は前年比一三〇%、今後もこの用途は拡大すると予想されている。

5　問題と展望

緩衝在庫なく市況は不安定　紅茶市況は最近十五年間で三回暴騰と低迷を繰り返した。上昇期には少しでも安値品を探す需要で下級品の値上がりが激しく、上下の価格差が縮まる。生産者は葉を大きく摘み、収量を増すのが有利として下級品を増産する。相場が落ち着けば、少なくなった高級品のみ値を維持して下級品は安くなる。しかし粗摘みの習慣ができた産地は労力的にも元には戻れない。一方、消費の大半は下物に慣れ、世界の平均した品質レベルは下る一方である。さらに、かつてはロンドンに相当な在庫があり緩衝的役割を果たしていたが、現在は生産されて約一カ月後には産地のオークションに上場され、生産地にも消費地にも必要以上の在庫はなく、需給バランスが崩れればただちに相場が動く構造になってしまった。

紅茶産業の繁栄には生産コストを上回り、拡大再生産の可能な、しかも需要の伸びを阻害しない程度の安定した市況が望ましい。これに関しては一九七六年の国連貿易開発会議（ＵＮＣＴＡＤ）の総会決議による一次産品総合計画に、紅茶も対象とされ、共通資金による国際的緩衝在庫などの商品協定と輸出所得補償制度や消費促進運動の展開が検討された。その後、何回も実務者会議が開かれ、輸出割当の配分、品質基準、価格帯等討議されたが、具体的にはなにも決まっていな

い。これは生産国がその後の紅茶の価格の急騰で熱意を示さなくなった事情にもよっている。この点、市況の低迷が続けば再び検討の余地はでてこよう。

強まる援助要請　一方、南北の貧富の差の是正という観点では、生産国より先進消費国に対し、生産設備改善のための資金援助や輸入障害の撤廃を求め、さらに付加価値を付けてより多くの外貨と、周辺産業の振興をはかるべく包装紅茶やインスタントティーの買入れ、あるいは技術供与や投資の要請がますます強まってくるであろう。

具体的にはスリランカでは茶業のインフラストラクチャー改良等の対日借款の要望もあるが、金の使途の追跡が難しい点で見送られている。インド、バングラデシュよりインスタントティーや、混合、包装の合弁要請も常にでるが商業ベースでは採算に乗らない。この点、三井農林のインドネシア合弁茶業は資金と技術において、今後の発展途上生産国との共存を目ざす一つのテストケースになる可能性がある。日本の進歩した農業技術によって経営的に充分成り立つことが示せれば、旧生産地の再開発にも応援できることになろう。

一方、包装品の割高関税（先進国二〇％、特恵国一四％）の引下げ要求も強い。特恵率の引下げはともかく、単純引下げでは、現在でもアメリカ製品による市場の混乱が起きており、消費の拡大より、市場の縮小による生産国からの原料茶の輸入減少になりかねない。今は消費者に対する啓発活動によって紅茶の市場を大きくし、生産国からの輸入量の増大に努力するのが望ましいと考えられる。

〈参考文献〉

(1) International Tea Committee Bulletin, *Tea Statistics*, J. Thomas and Co. Ltd., 1960～1989.
(2) 『酒類食品統計月報』一九八九年十月号、日刊経済通信社。
(3) 斎藤禎『紅茶読本』改訂版、柴田書店、一九八八年。
(4) 荒木安正『紅茶技術講座』、柴田書店、一九七八年。
(5) 大川昭子『コーヒーと紅茶』、金国社、一九七三年。
(6) 出口保夫『英国紅茶の話』、東京書籍、一九八二年。
(7) 相松義夫『紅茶と日本茶』、恒文社、一九八五年。
(8) 『新茶業全書』改訂版、静岡県茶業会議所、一九八八年。
(9) 『コーヒー紅茶辞典』改訂版、帝国飲食料新聞社、一九七五年。
(10) 『茶業統計』、全日本紅茶協会、一九八九年。
(11) *The Culture and Marketing of Tea*, Oxford University Press, 1956.